NPO法人
森を再生する会 会報
第 24 号

２０１１年１２月１０日
NPO 法人　森を再生する会

水源の森を守ろう！ 取り戻そう！

— 目 次 —

森づくり講演会・・・・・・・・・・１P
巻き枯らし間伐と植樹祭 in 納庫・２P
植樹祭に参加して・・・・・・３－４P
秋の植樹祭 in 東浦・・・・・・・・・４P
植樹祭に参加して・・・・・・・・・５P
アンケート結果・・・・・・・・・６P
巻き枯らし間伐のメカニズム・７P
随想・自然に生かされて・・・・８P
寄付の受付・・・・・・・・・・・８P

森づくり講演会が行われました

演題：『水源の森は都市の森」

平成 23 年 7 月 23 日　安城市文化センター
講師:広島大学教授　中根周歩先生

講演会で熱心に耳を傾ける市民

私たちが進める水源の森づくりの重要性について、広く市民に知ってもらえるよう森づくり講演会を行いました。講師の広島大学中根周歩教授は四国で実証的な研究を進めた方であり、昨年秋、国会議員の森づくり学習会で講師を務めた方です。

広葉樹林の方が針葉樹林より保水力が大きい

中根周歩教授は自ら山に入り、針葉樹と広葉樹の山の土の保水力の違いを明らかにしました。実験の結果は明らかに広葉樹林のほうが保水力が大きいというものでした。私たちがスギ・ヒノキの

放置林を伐採し広葉樹を植え水源の森をつくるという活動の正しさが証明されました。

人口のダムより緑のダムを！

日本の多くの河川で建設されたダムづくりは発電のほか、灌漑用水や洪水防止が目的です。中根周歩教授は、今すぐ間伐を急ぎ、広葉樹の山に戻し保水力の高い緑のダムづくりをすることが何より大切だと静かな口調ながら力強く話されました。これまでもダム反対の住民運動の味方となりすべて勝訴に導かれました。

現地指導会

NPO 法人森を再生する会が購入した納庫の山で講演会翌日の７月２４日、中根周歩教授による水源の森づくり現地指導会が行われました。今後、私たちが進める皮むき間伐の方法を指導いただき有意義な会となりました。

現地指導（NPO 森を再生する会所有林）

皮むき間伐の指導

株式会社デンソー社会貢献活動制度ＤＥＣＯ地域還元事業

巻き枯らし間伐と植樹祭 in 納庫「水源の森」

９月２３日秋分の日にデンソー社員の皆さんと NPO 法人森を再生する会会員・一般市民合わせて４１名の参加のもと巻き枯らし間伐と植樹を行いました。株式会社デンソーからは社員のほか企画課長杉浦龍次さんも参加してくださいました。

デンソー課長さん大活躍！

今年は雨が多く、砂利道が深くえぐれていてマイクロバスでの進入が無理だということが判明しました。デンソーの杉浦課長さんが自らの四輪駆動車を途中から参加者の輸送に提供いただき、無事日程を終えることができました。本当に有難い助っ人で、大いに感謝しています。

それにしても針葉樹の山は大雨が降ると道が川となり道路を決壊させるという広島大学中根周歩教授の話のとおりの現象を間近に見ることができたのも、すごい体験でした。

巻き枯らし間伐をする参加者

巻き枯らし間伐の体験！

今回の植樹祭の特色は、NPO 法人森を再生する会として始めての巻き枯らし間伐を全員に体験してもらったことです。この方法なら女性や子供でも

簡単に間伐を行うことができることを学びました。

広葉樹を植える

スギを伐採した跡地にブナ・ミズナラなど１５種類４０本の土地本来の広葉樹を植えました。今後進める間伐した後にこれらのどんぐりが落ち、広葉樹の水源の森に転換していくことを願って植えました。

道の駅なぐらアグリステーションで昼食！

巻き枯らし間伐と植樹を終えた後は、すぐ近くに開店した道の駅なぐらアグリステーションで地元のお母さんたち手作りのそばと五平餅の定食に舌鼓を打ちました。２回の部屋を貸し切りで使うことができましたので、森づくりの話を、食事を楽しみながらゆっくりできたのも良い思い出となりました。１階では地元の農産物のお土産を買うこともでき、楽しみがプラスされたことも好評でした。

植樹祭に参加して

杉浦彦展

森を再生する会で購入した設楽町納倉の山での秋の植樹祭に参加し、水源の森である照葉樹を植樹して自然豊かな森を育て、末永く子孫に残していかなければならないと、改めて意を強くしたものである。

それは 6 年前、九州を旅行した際に足をのばし、宮崎市の西方の綾川沿いに位置する綾町を訪れ 1 泊し、前町長の故・郷田實さんが綾川上流の国有林の伐採計画を阻止し命をかけて守った 3,000 ヘクタールの照葉樹林を見聞した時のことを思い出しました。

山や谷は、数 10 種類の照葉樹の樹木と大樹が繁茂し、原始さながらの自然の生態系の豊かさと素晴らしさに圧倒されました。

そして近未来の社会は、高度工業社会から、本物の自

然を求める時代になるのではないかと感じたのであった。

45 年前の綾町では、「夜逃げの町」と言われた事もあったが、今では「照葉樹林の町」「名水の町」「有機農業の町」としても知られ、年間 100 万人を超す観光客はもとより、癒しの里として訪れる人、移住する人が後を絶たない町となっているのです。

森を再生する会が毎年照葉樹木の植樹を行っていく事の大切さを広めると同時に、今後は奥山保全トラスト運動の輪を広げ、三河の山々や矢作川の・豊川そして三河の海が自然の生態系が豊かになることを念じてやみません。

植樹祭に参加して

納倉の山にて

加藤由紀子

９月２３日（金）台風１５号が去り秋晴れの今日、私は昨日より体調が悪く微熱が有り重い体であったが、医師会館から設楽の山へ出発。目的地に近付くと、道幅が狭くなる山道はマイクロバスを降り、目的地まで軽トラックや４輪駆動車でピストン輸送の予定であったが、事前確認の結果を踏まえて、マイクロバス以外の車で分乗して現地に到着。

苗木を持ち各自山を登ること１０分。そこは木漏れ日が差し込む澄んだ空気がおいしく感じられ、体全体の細胞が浄化されるように感じた。

その後森の学校のごとく、エスペックミックの吉野さんから間伐のやり方として今回初めて実践する巻き枯らしの方法の説明を聞く。

さっそく針葉樹の地上１２０センチから上部３０センチ巾で上下にのこぎりで切りこみを入れて樹皮を剥ぐ。女学生の数人も指導を受けながら急斜面の針葉樹に真剣に挑戦していた。皮を剥がすと出てきたツルツルとした地肌に「今日までありがとう」と言いながら２本を完了。

チェーンソーを使用して１０人がかりの間伐作業とは違い、枯れるまで時間がかかるが、作業時の危険が非常に少なく子供を含めて幅広い年齢層で実施できる方法であると確信した。

今まではいつも県道近くが植樹の場所であったから、今回の現地までは遠く感じたが、これからは本当に必要な山々の森作りをじっくりと取り組むべき時が来ているのかもしれないと感じた。今後の巻き枯らしの様子が楽しみ。

あいち森づくりと緑づくり事業

秋の植樹祭 in 東浦　2011.10.9

今年の特色

今年は社会福祉法人翌檜会の施設「シーダーハウス」で植樹祭を行いました。丘の上に立つこの施設は、当初から斜面の下に民家があり、土砂崩れを心配する声がありました。

そこで、あいち森と緑づくり環境活動学習推進事業の助成を受け、秋の植樹祭をこの地で開催することにしました。

大村知事も植樹

ＣＯＰ１０の精神を受け継いで

昨年は愛知県でＣＯＰ１０が開催され里地･里山イニシアチブが提唱されました。今回の植樹はその精神を受け継ぎ、里地で生態系保全のための植樹です。自然の復元こそ私たち人間が生き続けることのできる礎だと考えるからです。

この趣旨に賛同していただき、参加者は１６７名に上りました。特に忙しい中、来賓として大村愛知県知事吉岡高浜市長、神谷東浦町長も参加、植樹に汗を流されました。施設の前はケヤキを他は土地本来の木であるアカガシ、ツブラジイ、タブノキなど２３種類６６２本を植えました。

森づくり講演会

午後は、広島大学教授中根周歩先生をお招きし、「里山から奥山へ」と題し、森づくり講演会を行いました。シーダーハウス満杯の聴衆で、質疑・意見発表では、東三河からの参加者から、設楽ダムより緑のダムづくりへと意見が出され、大いに盛り上がりました。

植樹祭に参加して

シーダーハウスにて

加藤由紀子

晴天の中、東浦の小学校の駐車場から竹林の坂道を登りシーダーハウスの広場に到着。すぐにあふれんばかりの人々の集まりになる。

豚汁を豆腐汁に案内板を書き換え、あいち炭やきの会や看護学校の生徒さんたちの協力を得て、１５０人分の汁作りに取り掛かる。大村愛知県知事のあいさつをはじめ皆さんの挨拶が終わり植樹が始まる。各自自分の名前を書いた札を付けて２～４本位植樹する。穴に入れる培養土・炭などが準備されていた。きっと大きく成長する事でしょう。植樹を終えた人々が列を作っ

て豆腐汁を待っており、配るタイミングや大カップの為、具材の調整に混迷するが、看護学生たちが手際よく上手に盛ってくださり大助かり。

山での植樹は苗木を上げるだけでも大変ですが、ここ平地では斜面が有っても楽であった。植樹した人たちの汗が未来の子供たちへの貴重な贈り物になる事がうれしい。

午後は中根先生の研究成果を、データや写真の資料とスライド使ってわかりやすく説明してくれた。聞きながら、昨年登った鳥海山のブナ枯れの被害の大きさを思い出すとともに、９月に行った知床半島の世界遺産の自然林が、素晴らしい紅葉を見せる熊の生息地である事を思い出した。

中根先生の講演では、豪雨災害による水源の森の崩壊が、人工林の手入れをきちんと実施することにより最小限の被害で済む事がよく理解できた。また樹種による根の張り具合の違いと土壌把握力の違いもそして、竹林の間伐の必要性・重要性も再認識できた。今後は今回理解できた事をより多くの皆さんに伝達するよう努力していきたいと思った。

あいち森と緑づくり事業「秋の植樹祭 in 東浦町」

森林生態系保全の学習事業アンケート結果

（回答者３２名／１６７名）

１、この取り組みに参加する前と比べ、森と緑の重要性について理解が深まりましたか？

① 大変深まった　２０名
② 少し深まった　１１名
③ あまり深まらなかった　１名

２、今後とも、こうした取り組みに参加したいですか？

① 参加したい　３０名
② 参加したくない　２名

３、その他、自由にご意見やご感想をお聞かせください。

・準備、長時間にわたりご苦労様でした。中根周歩先生の講演勇気付けられました。竹林の整備に注力します。（田中徳雄さま）
・この企画に参加して地球環境保全に少しでもお役に立てればうれしいです。大村愛知県知事にお会いできてうれしかったです。（丹下堅代さま）
・良い事なのでもっと各地で行われると良い。県の補助金が多いともっと良いと思う。（神野悦夫さま）
・森の育成についてよく理解できた。これからも少しでも森の再生にかかわりたい。大変有意義な会でよかった。知事、市長、町長まで出席され熱の入れ方がよく分かった。中根周歩先生の講演を聞いて

森林の実態が良くわかった。（藤田伸吉さま）
・とても良い講演会でした。（阿部啓子さま）
・会長の話が分かりやすかった。
・大人が森林伐採している中で今回始めて子供の私たちが植樹したことで、空気が良くなるのではないかということを考えると非常に興味深い行事に参加できたと思う。
・大勢の人の参加を得て、植樹祭が楽しくできた。
・緑のダムの考え方はすばらしく楽しく聞かせていただきました。（都筑一男さま）
・自分で植樹することで樹木の生長が身近に感じられた。緑を増やして生きたい。楽しく過ごさせていただきありがとうございました。
・人が生きるためには自然が大切で重要なことが理解できた。県、市、町の重要なポストの方が参加され感激しました。これから何回も参加したい。
・森の大切さを東浦町民に知らせる良い機会です。森が昔のように雨水のダムになってほしい。
・主催者ならびに協力者に感謝。知人が多数できうれしい。
・樹木の名前が覚えられてよかった。
・東浦町の自然が工場建設、住宅建設等で失われる中、自然を残すためにもこのような活動が必要と考えるので今後も参加したい。（神谷信三さま）

≪巻き枯らし間伐のメカニズム≫

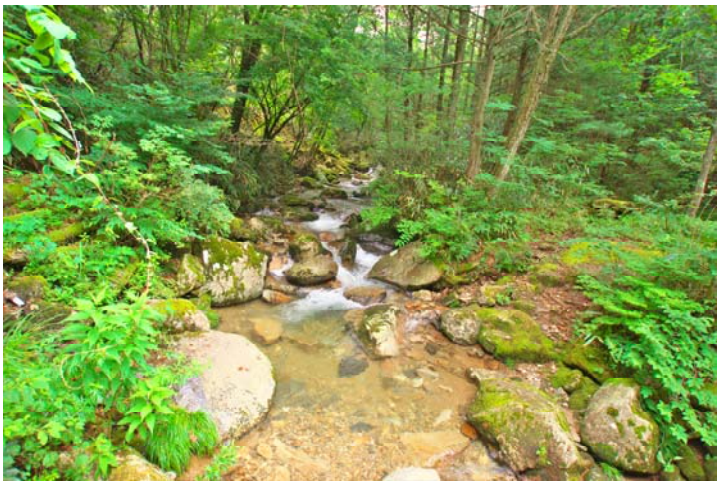
今まで、木を切り倒していたが、後の処分が大変であった。
そこでノコギリやチェーンソーで地上から 120 センチの幹の周りにぐるっと切り込みを入れ、３０センチ幅くらいの環状剥皮をする事で、形成層と師部をとりのぞき、伐るべき木を立ち木のまま枯らす。師部は葉でできた養分を樹木の各部（その枝より下）に送るので、根への養分移動が無くなり根は水分吸収ができなくなり、立ち木の形状のまま枯れる。
巻枯らし間伐は、すぐに枯れ葉が落ちず時間がかかるデメリットはありますが、逆に少しずつ風雪害に強い林に誘導できるメリットがあると考えられている。

メリット
〇多少時間はかかるが、林内が明るく、風雪害に強い森林の育成に役立つ。
〇作業に危険性が少ない。　→　経験の少ない人でも作業が可能。
〇重い機械を使用せず、道路から離れていても使用器具の持ち運びが容易。
デメリット
〇枯れるまでに数年かかる。
〇数年経つと枝が落ちたり、倒れたりするので、道路に近い所や人が入りやすい所では危険性がある。

随想

自然に生かされて

NPO 法人森を再生する会　理事長　神谷輝幸



今年も会員の皆様の絶大のご支援とご協力・ご厚情により、大きな成果を収めることができ心から感謝いたします。

今、私には心を痛めていることがあります。東北地方を襲った大震災もさることながら、それによって引き起こされた東電福島原発からの放射能漏れから端を発しています。核兵器による放射能の恐ろしさと同じく、現実に起きた福島原発で示された原子力発電の恐ろしさ・不安です。すでに福島県のみならず海水・陸地・大気の汚染は各地に撒き散らされ、その実態は不明です。

原子力発電の持つ恐怖は、知らぬ間に作られた全国５４箇所の原子力発電が今後福島と同じようにいつ事故が起きるか分からないことです。

さらに厄介なのは、使用済みの核燃料がなお高放射能を持ち、処理もできず、捨て場所も無いという点です。

そして、使用済みの核燃料を再利用する目的の高速増殖炉もんじゅの研究をいまだに放棄しないこと（ヨーロッパでは研究から手を引いた。）

もっと邪悪なのは、こうした危険極まりない原子力発電施設を外国へ輸出することを政府は手を貸していること。国家の良心と品格はどこへ行ってしまったのでしょうか。日本はこのままでは世界に誇れる国とはいえません。

このようにコストも高く、危険で、汚い原子力エネルギーから自然エネルギーへの転換が図れない政治の無責任さ。

かてて加えてＴＰＰで明らかになった、遺伝子組み換え食品の日本侵入の危機。

これらの問題の病理は、「原子力村」に代表される関係官僚、関係学者、関係政治家、関係企業が一体となった利益集団が強固な結束で立ちはだかっている構図が、あるからだということが分かってきました。

今こそ、私たちは自然に生かされていることを知り、自然に立ち返ることが必要な時代だと思います。そしてわが身を振り返り「貪欲さ」から「足ることを知る」日常へと目覚める必要を感じています。

＊　寄付金の受付　＊

次の方からご寄付をいただきました。

・国際ソロプチミスト安城 様　３万円

・神谷俊治 様　１万円

ありがとうございました。